

幼児期における基本的情緒形成とその障害に関する研究 目 次

総括研究報告書

1. 幼児期における基本的情緒形成とその障害に関する研究

呉大学看護学部 清 水 凡 生 96

分担研究報告書

2. 幼児期における情緒形成の基礎的研究

広島県立保健福祉短期大学 竹 中 和 子、下 見 千 恵

呉大学看護学部 片 山 美 香

呉大学看護学部 清 水 凡 生 100

3. 親の育児感情と乳幼児の感情認知との関連性について

恵泉女学園大学人間科学部 大 日 向 雅 美 107

4. 幼児期の自己制御機能の発達

和歌山大学教育学部 森 下 正 康 112

5. 正義感の発達を規定する家族要因の研究

埼玉大学教育学部 首 藤 敏 元 120

6. 育児への積極的関与に影響する家族要因に関する研究

広島大学教育学部 岡 本 祐 子 129

7. 乳幼児期の情緒形成不全の早期発見と治療的介入方法の研究

高知県立中央児童相談所 澤 田 敬 135

幼児期における基本的情緒形成とその障害に関する研究

主任研究者 清 水 凡 生
(呉大学看護学部教授)

研究要旨 出産後赤ちゃんに対して愛着を深める動機は初めて抱っこした時であり、母親としての実感は授乳によって強くなることが明らかになった。新生児期に母親から『活発』な性格とされた乳児は、睡眠・覚醒リズムが安定しており、授乳場面での相互作用も良好であった。

育児に不安や苛立ちの強い場合、父母ともに、乳児の感情認知にやや意図的かつ否定的な要素が込められている傾向が認められた。

母親の受容的態度は子どもの自己主張能力を高め、誘導的育児スタイルは自己制御能力を高める傾向がある。また、統制的態度や力中心の育児スタイルは子どもの自己抑制機能の発達を阻害する。母親の力中心の育児スタイルは自己主張だけが強く自己抑制能力の低い子どもを育てる。

思いやりや正義感の発達は同性の親子の間での一体感の形成を促すが、異性間ではかえって抑制される。また、親の自己制御のしつけは同性の親子の間でなされた場合は、思いやりや正義感の発達を促すが、異性間ではかえって抑制される。親の子どもへの介入には性役割を考慮する必要がある。

幼児をもつ母親の母親役割受容には、家族とのかかわり方、特に夫との関係が重要な意味をもっていること、母親役割を受容し、積極的に育児に関与していくためには、夫が妻の育児に関心を示し、心理的にサポートしていくことが重要であることが示唆された。

産婦人科病院、保育所、乳児園でチェックリストを使用し、リスク事例をピックアップし、一次介入を乳幼児精神保健学の専門家の指導の下で現場の職員が行い、二次介入を現場で、現場の職員の協力の下で専門家が行った。その結果良好な親子関係が育成された。

分担研究者 大日向雅美(恵泉女学園大学人文学部教授)、森下正康(和歌山大学教育学部教授)、首藤敏元(埼玉大学教育学部助教授)、岡本祐子(広島大学教育学部助教授)、澤田敬(高知県立中央児童相談所医務主任)

研究協力者 竹中和子(広島県立保健福祉短期大学講師)、下見千恵(広島県立保健福祉短期大学助手)、片山美香(呉大学看護学部講師)

■ はじめに

本研究は乳児期から幼児期におよぶ発達を視野におき、心の健全育成に資する成果を得るための研究として企画したものである。そのために心の発達に関係する保護者、幼稚園・保育園の保育者などによってもたらされる諸要因の分析を年齢の経過にしたがって行い、それらの子どもへの影響を具体的に、縦断的に検討しながら育児、保育における心の健康作りのための施策を明らかにしようとするものである。

■ 情緒形成の基礎的研究

乳幼児の気質的行動特徴と保護者の養育姿勢や育児意識等について新生児期から縦断的に調査し、発達初期における子どもの情緒形成に影響する要因を検討しようとしたものである。そのために健康な新生児とその母親を対象に看護者による新生児行動特徴評定、授乳場面における相互作用評定と、退院前の母親に対して、出産体験に伴う感想、現在の心身の状態、対児感情や認知、そして育児意識や姿勢についての質問紙調査を行った。気質的行動特徴は新生児期において、すでに母親によって認知されており、看護者による評定と相関するものが多かった。しかし、育児姿勢や育児意識は新生児期、乳児期前期には未だ明確でなく後期に至ってはじめて個々の特徴が示されるようになった。したがって、新生児の気質と育児姿勢の関係は今後の経過に待つところが多いが、現在までの資料で認められるところを示すことにした。

質問紙調査から、出産後赤ちゃんに対して愛着を深める動機は初めて抱っこした時であり、母親としての実感は授乳によって強くなることが明らかに

なった。

乳児の行動特徴と母親による気質認知および育児意識との関連については、新生児期より乳児は個性的で、母親はそれぞれに受け止め、一貫してはいないが親としての思いをもって乳児に関わっていた。また、母親の気質認知や育児意識は乳児の成長・発達に伴い少しずつ明確化していた。

新生児期に母親から『活発』な性格とされた乳児は、睡眠・覚醒リズムが安定しており、授乳場面での相互作用も良好であった。また、乳児期前期で、『活発』な性格とした母親は、新生児期から乳児が泣き止みにくかったがよく働きかけていて、より肯定的にとらえているようである。

将来への思いで、乳児期前期に単に『元気で』さえあればよいとした母親は新生児期乳児への働きかけが少なく、乳児は活気が乏しく泣き易かった。子どもは自然に育っていくといった育児観が背景にあることが予測され、育児への積極的係わりが欠如していた。一方、新生児期に『心優しく』と願った母親は、乳児の反応性は低かったがよく働きかけていた。

■ 育児ストレスに関する父母間の比較研究

自己の感情を言葉で十分に伝達できない乳幼児に対しては、養育者がその表情から乳幼児の感情を的確に判断して対応する能力が求められる。通常は乳幼児の感情認知は母親に適性があると考えられているが、一方、父親の感情認知能力との間にどのような差異があるのだろうか。さらには、養育者側が抱えている育児ストレス等の要因は、乳幼児の感情認知にどのような影響を及ぼすのか。

育児能力に関する父母間の比較を行う研究の一環として、乳幼児の感情を把握する能力に焦点を当てて父母間の相違を検討すると共に、その背景要因の一つとして、養育者としての育児感情がどのように影響しているかを明らかにしようとした。

育児感情、および乳児の表情から感情を把握する能力について、父母間の比較を行った結果、必ずしも明確な性差は認められなかった。一部の項目で、母親の方が子どもとの共有経験をより強く示す傾向が認められ、他方、父親では分離経験を示す傾向が得られている。しかし、他の大部分の項目では父母ともに同様の傾向が示されていて、有意差はない。同様に、育児における充実感あるいは苛立ちや不安を尋ねた項目でも、父母の回答は傾向として類似性が高い。しかしながら、「できることなら育児は妻に任せたい」「子どもと気が合わないと感じるこ

ともある」等、育児からの距離感を大きくする回答も父親に顕著にみられた点である。

このように、育児感情の面では、一部に父母間の差異が示されてはいたものの、乳児の感情認知では殆ど性差が認められていない。むしろ、育児に不安や苛立ちの強い場合、父母ともに、乳児の感情認知にやや意図的かつ否定的な要素が込められている傾向が認められた。本研究は、乳児の感情検査と育児感情との関連性を検討しようとしたパイロットスタディであり、今後は調査対象をさらに広く求めて、分析を深めていく。

■ 幼児期の自己制御機能の発達

幼稚園における幼児の自己制御機能について、思いやりおよび攻撃性との関係、さらに親子関係が自己制御機能の発達にどのような影響を与えるかについて検討した。そのために幼稚園児の母親とクラスの担任教師に対して、子どもについて評定を求め分析した。

自己制御(自己抑制と自己主張)・思いやり・攻撃性尺度に関して、家庭での母親評定と園での担任評定との相関は全体に低い値であった。また二人の教師による評定間の一致度も低かった。

担任評定による園での子どもの自己抑制の発達に関して、男子では年中から年長にかけての発達が著しく、女子では年齢の上昇と共に発達していた。自己主張の発達に関しては、男子では年齢による変化がないのに対して、女子では年少から年中にかけて発達が見られた。

思いやりについて、年中児では、男子は自己抑制の高い群の方が得点が高いが、女子には有意差はなかった。年長児では、男女共に自己抑制も自己主張も共に高い群の得点が高かった。

攻撃性について、年中児では男子は自己抑制の低い群の方が、女子は自己主張の高い群の方が攻撃性が高かった。年長児では、男子の場合は自己主張が高く自己抑制の低い群の攻撃性が高く、女子の場合は自己抑制の低い群の攻撃性が高かった。

また、園での自己制御について、年中児の場合、母親の受容的態度が男子の自己主張を育て、母親の誘導スタイルが女子の自己制御能力全体を育てる可能性があった。それに対して、年長児の場合、母親の統制的態度や力中心スタイルが男子の自己抑制機能の発達を阻害する。また、女子に対しては、母親の力中心スタイルが自己主張機能を高め、さらに、母親の統制的態度が自己主張だけが高く自己抑制の低い子どもを育てる可能性がある。以上の結果は、

親子関係と家庭での子どもの特徴との関連とは異なった結果であった。

■ 思いやりと正義感の発達を規定する家族要因の研究

幼稚園における幼児の自己制御機能について、思いやりおよび攻撃性との関係、さらに親子関係が自己制御機能の発達にどのような影響を与えるかについて検討した。そのために幼稚園児の母親とクラスの担任教師に対して、子どもについて評定を求め分析した。

自己制御(自己抑制と自己主張)・思いやり・攻撃性尺度に関して、家庭での母親評定と園での担任評定との相関は全体に低い値であった。また二人の教師による評定間の一致度も低かった。

担任評定による園での子どもの自己抑制の発達に関して、男子では年中から年長にかけての発達が著しく、女子では年齢の上昇と共に発達していた。自己主張の発達に関しては、男子では年齢による変化がないのに対して、女子では年少から年中にかけて発達が見られた。

思いやりについて、年中児では、男子は自己抑制の高い群の方が得点が高いが、女子には有意差はなかった。年長児では、男女共に自己抑制も自己主張も共に高い群の得点が高かった。

攻撃性について、年中児では男子は自己抑制の低い群の方が、女子は自己主張の高い群の方が攻撃性が高かった。年長児では、男子の場合は自己主張が高く自己抑制の低い群の攻撃性が高く、女子の場合は自己抑制の低い群の攻撃性が高かった。

また、園での自己制御について、年中児の場合、母親の受容的態度が男子の自己主張を育て、母親の誘導スタイルが女子の自己制御能力全体を育てる可能性があった。それに対して、年長児の場合、母親の統制的態度や力中心スタイルが男子の自己抑制機能の発達を阻害する。また、女子に対しては、母親の力中心スタイルが自己主張機能を高め、さらに、母親の統制的態度が自己主張だけが高く自己抑制の低い子どもを育てる可能性がある。以上の結果は、親子関係と家庭での子どもの特徴との関連とは異なった結果であった。

■ 育児期の母親の母親役割り受容と家族関係に関する研究

育児による親の発達を支える家族要因について、心理学的な視点から分析したものである。本研究の

結果をまとめると、次のような点が示唆された。

全体的にみると、父親よりも、日々、直接、育児に関わることの多い母親の方が、親の発達感には有意に高かった。これは、先行研究を支持する結果であった。

しかしながら、母親の職業の有無によって、親の発達感に影響を与える要因には、相違が認められた。母親が無職の家庭では、父親の家事・育児参加が、母親が有職の家庭では、夫婦の調和性が、親の成長・発達感に影響する重要な要因であることが示唆された。また、母親の職業観も、母親本人のみならず父親の発達感にも影響を及ぼすことが示された。

少子高齢社会を迎えた我が国では、結婚・出産後も子育てと職業を両立しようとする傾向は、今後、ますます増大していくことであろう。しかしながら、よりよい子育てを実現していくためには、親の側も育児に積極的に関与し、自らにとっても育児の意義を実感できる体験が不可欠である。本研究の結果より、以下の点が示唆された。

まず、夫婦で子育てを行うことの重要性である。これは昨年度の研究からも示唆されたことであるが、母親だけでなく、父親も主体的・積極的に子育てに関わるのが、子育ての否定的意識を軽減するのみでなく、父親・母親自らの発達につながるのである。

また、母親の職業観、つまり職業に就く理由、就かない理由は、職業の有無以上に、親としての発達にとって重要な要因であることが示された。職業に就くこと・就かないことをいかに主体的に選び取り、その意義を積極的に認められるかが、母親本人のみならず、夫の父親としての発達感にも影響を及ぼすのである。ライフサイクルの中に占める育児期の比率が相対的に減少した今日、夫も妻も子育てと職業を自らの人生の中にどのように組み込み、両立させていくかが、重要な課題であると考えられる。

■ 乳幼児期の情緒形成不全の早期発見方法の研究

子供は心温かい父母の下で育てられると、豊かな情緒の形成が保証される。しかし全ての父母は、毎日のように子供からかき回され、子育て混乱を起こしている。その上父母に子育てとは直接関係ない他のトラブルや、過去の心的外傷を今でも過去のこととして整理できていなく、乗り越えることができていないといった問題が重なってくると子育て混乱はひどくなり、虐待など子供に心的外傷を与えるようになる。このような状態にある乳幼児の心的外傷に対しては、早期発見、早期治療が大切である。

今回産婦人科病院、保育園、乳児園でチェックリストを使用し、リスク事例をキャッチし、一次介入を乳幼児精神保健学の専門家の指導の下で現場の職員が行い、二次介入を現場で、現場の職員の協力の下で専門家が行った。また乳幼児の心的外傷の治療にはアタッチメント療法が非常に有効だった。

産婦人科病院では妊婦で過去、現在の解決できていない心的外傷を助産婦が母に質問し、チェックリストでキャッチし、また助産婦から見たリスク妊婦をチェックリストでキャッチし、一次介入、二次介入をした。妊婦84名中一次介入11例、内二次介入3例だった。

保育園において気になる親子について、幼児の心的外傷の表現である心身症、異常行動をチェックリストでキャッチし、気になる父母像を保育士がチェックリストでキャッチする。これらの結果を統合して検討をし、リスク親子に一次介入した。保育

園児116名中一次介入のみで18例だった。児の心的外傷の治療は園で保育士が、自宅で父母がアタッチメント療法を行った。

乳児園では児退園後の父母の育児混乱を予防するため、気になる父母像を保育士がチェックリストでキャッチした。一次介入10例、二次介入1例だった。児の心的外傷に対しては園で保育士がアタッチメント療法を行った。

チェックリストはリスク事例発見に非常に有効だと思われる。しかし使用する助産婦、保育士は、乳幼児精神保健のスーパーバイザーの下で、乳幼児精神保健の知識を十分に身に付け、チェックリストの結果に操られることなく、自分の感覚を一番大切にし上手に利用すべきである。

リスク事例への対応は、その事例に合ったそれぞれ違った介入をすべきで、集団での対応では本格的育児混乱の解決にはならない。

幼児期における基本的情緒形成とその障害に関する研究

幼児期における情緒形成の基礎的研究

研究協力者 竹 中 和 子、下 見 千 恵
 (広島県立保健福祉短期大学講師) (広島県立保健福祉短期大学助手)
 片 山 美 香
 (呉大学看護学部講師)
 主任研究者 清 水 凡 生
 (呉大学看護学部教授)

論文要旨 本研究は、新生児期(第1回調査)と乳児期前期(第2回調査)における乳児の行動特徴と、母親がとらえている乳児の性格や養育姿勢との関連について検討し、支援の方向性を考察することを目的とした。第1回調査では、68組の健康な新生児とその母親を対象に、看護者による行動特徴評定および授乳場面における相互作用評定と、母親に対しての質問紙調査を行った。第2回調査では、第1回調査で協力で同意した母親に対して郵送法による質問紙調査を行い、33名から回答を得た。その結果以下のことが明らかになった。(1)乳児期前期までは、乳児の行動特徴には依然授乳の状態や身体生理の状態が反映していた。成長・発達とともに乳児の行動特徴は明確化しているが、母親の受け止め方は流動的で支援の可能性が期待される。(2)母親による「赤ちゃんの将来」への思いは、新生児期、乳児期前期ともに漠然とした内容が多かったが、後者では不明とする回答がなかった。乳児期前期までは、母親自身の経験やパーソナリティ等が反映していると予測されるが、今後わが子の個性がより明確に認識されるようになると実際の養育姿勢として示されると考えられる。(3)乳児の身体生理の状態が不安定であったり、分娩経過や授乳等で母親の疲労度が高いことが予測されるケースでは、母親の乳児の受け止め方や養育行動への影響が予測され、特に乳児期前期までの母子相互作用や母親への心身への支援の重要性が示唆された。

■ 問題と目的

乳児は生後まもなくから有能で个性的である(クラウスとケネル,古澤,古沢)。いいかえれば、乳児が単に養育者から影響を受けるだけではなく、乳児の様々な反応が養育者に影響を与えているということである。新生児期における乳児行動特徴についてはブラゼルトンの新生児行動評価(NBAS)があるが、評価者が限られることや簡便でないことで普及しにくい。また、新生児期は外的環境への適応期間であるということで環境要因の影響を受けやすく、新生児ひとりひとりの個性をとらえるということは経験的レベルに留まっている。また、新生児期からの行動特徴がその後の人格形成にどうつながっていくかということについて縦断的、系統的に明らかにされた研究はない。

子どもの個性を豊かに育てていくことは、養育者にとっても、家族にとっても、そして社会にとっても一つの大きな目標である。しかしながら、実践するのは容易ではない。私たちは、いつ頃から、どのようにして子どもの個性をとらえているのであろうか。果たして、真にひとりひとりの個性を受け止め大切に育てているのであろうか。

養育者は相互作用を通して乳児の行動から特徴を認知し、その子どもの性格としてイメージしていくと考えられる。養育者の「この子はこんな性格」と

いう受け止めは、育児姿勢に反映して相互作用が展開していく(図1)。乳幼児行動特徴は、1ヶ月、2ヶ月、3ヶ月時で一貫していたという研究結果もあるが、さまざまな要因で変化しているという報告もある。また、養育者の「どのような子どもに育てたいか」という養育姿勢は、養育者自身のパーソナリティや育児経験、家族関係等を基盤としているが、日々の相互作用を通して変容していく。つまり、養育者はそれぞれ養育姿勢をもって育児に臨み、子どもの情緒発達や人格形成に大きな影響を与えているが、必ずしも養育者の思惑通りにはならず、子どもの個性に影響され変化していくと考えられる。

本研究では、新生児期と乳児期前期における乳児の行動特徴と、母親がとらえている乳児の性格や養育姿勢の関連について検討し、支援の方向性を考察する。

■ 用語の操作的定義

赤ちゃん:

新生児、乳児に対応することばであるが、ここでは、主としてわが子としての新生児、乳児とする。

養育者:

ここでは両親をさし、看護者は含めないものとする。

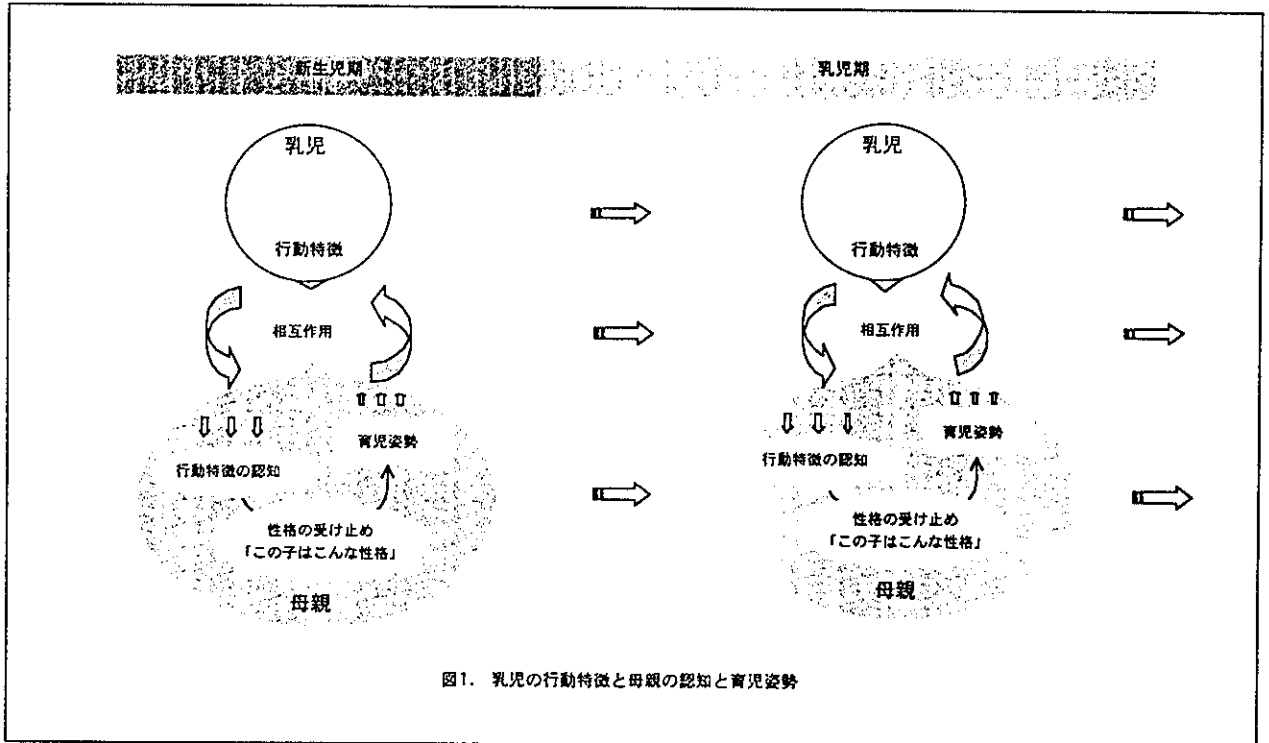


図1. 乳児の行動特徴と母親の認知と育児姿勢

看護者:

看護婦(士)あるいは助産婦あるいは保健婦(士)とする(以下Ns.)。

行動特徴:

特に乳児および年少幼児の場合に気質や性格特性に対応するものとする。

養育姿勢:

「どんな子どもに育てたいか」という養育者の思いや態度とする。

■ 研究方法

1. 第1回調査(新生児期)

1) 被験者

出生より10日目までの健康な新生児(在胎週数37w5d~42w6d, 生下時体重2,672g~3,666g, Apgar score 9点以上)とその母親(初産婦34名, 経産婦34名/年齢19歳~39歳, 平均年齢28.5歳, SD=4.11)68組

2) 調査期間

1999年2月~1999年4月

3) 調査場所

Y医院およびM病院産科病棟および新生児室(Y医院は母児同室制, M病院は母児別室制をとっている)。

4) 質問紙

① 新生児行動特徴評定表

新生児の行動特徴をNs.が評定するもので、ブラゼ

ルトンの新生児行動評価(NBAS)4の評価内容や、庄司らの「新生児行動様式質問紙」の項目を参考に検討して作成した。新生児の身体生理的状态に関連した9項目と反応性や泣きなど心理的状态に関連した項目15項目の計24項目からなる。各項目は「全くあてはまらない」から「あまりあてはまらない」、「どちらともいえない」、「ややあてはまる」、「非常にあてはまる」の5段階で評定する。

② 新生児と母親の相互作用評定表

授乳場面における新生児と母親の相互作用に関するもので、母子の応答性を問うている2項目と主として母親の赤ちゃんへの働きかけを問うている2項目、母親の疲労について問うている1項目の計5項目からなり、「新生児行動特徴評定表」と同様に、5段階尺度で評定する。

③ 母親に対する育児に関する質問紙

(1)「赤ちゃんの性格」、(2)将来への思い、(3)「赤ちゃんに対する行動特徴の認知」についての項目からなる。(1)(2)は文章完成法、(3)は5段階尺度による回答の方式をとった。また、(3)の項目は、看護者による「新生児行動特徴評定表」と一部対応した内容とした。

5) 手続き

① 同一新生児について看護者1名または2名が、「新生児行動特徴評定表」にしたがって生後2日目以降にそれぞれ評定を実施した。新生児行動評定の一致率の平均は.90(.81~.98)であった。

② 同一組みの新生児と母親について、看護者1名または2名が、それぞれ「授乳場面における母子相互作用

幼児期における基本的情緒形成とその障害に関する研究

表1. 乳児の行動特徴因子と項目

乳児行動特徴因子	Ns. 評定による新生児行動特徴項目	母親による新生児行動特徴認知項目	乳児期前期における母親の行動特徴認知項目
睡眠・覚醒リズム	睡眠-覚醒リズムは安定している	よく眠る	だいたい決まった時間にお乳を飲まざる ウンチをする回数や時間等はだいたい決 まっている
	眠っているときはぐっすり眠る		眠っている時間と目覚めている時間のリス ムは安定している
活気 (食事・栄養)	しっかり吸乳する	母乳(ミルク)をよく飲む	母乳(ミルク)をよく飲む
	母乳やミルクの飲みはよい	元気がいい	寝て起きるとよく泣く
(運動のコントロール)	手足を活発に動かす		手足を活発に動かす
反応性	がらがらや人の声など音のするほうに 顔をむける	私のことをよくみる	がらがらや人の声など音のするほうに顔を むける
	人の顔をじっとみつめる	抱っこすると安心する	人の顔をじっと見つめる
	目と目がよく合う	話しかけるとじっと聞いているように 感じる	目と目がよく合う
	笑顔をよくみせる	母親だとわかっていると感ずる	話しかけるとじっと聞いているように感じ 母親だとわかっていると感ずる
情緒安定性	表情が穏やかである	よく笑顔をもみせる	好奇心旺盛である
	新しい刺激にすぐに慣れて落ち着く 泣き出してもすぐに泣きやむ		よく笑顔をもみせる 機嫌よくしていることが多い 新しい刺激にすぐに慣れる
泣き易さ	ちょっとしたことですぐに泣く	よく泣く	よく泣く ひとりにされるとすぐに泣く ちょっとしたことですぐに泣く
	泣き声は弱くない あまり泣かない	あらなしい子が	泣き声は弱くない 泣き声は甲高い
泣きの強さ	泣き声は激しい 泣き声は甲高い		泣き声は甲高い

●内は逆転項目

用評定表」にしたがって、生後4日目より退院までの期間実施した。母子相互作用評定の一致率の平均は.91(.72~1.0)であった。

③各施設の看護師が退院前の母親に質問紙を個別に配付し、退院までに回収した。

なお、ご協力頂いた施設および母親や看護者には、本研究の主旨にご賛同いただいたうえで実施した。調査時間等を配慮して、質問項目は最小限とし、また、縦断的研究であることから記名方式をとったが、個人のデータの守秘に努めた。

2. 第2回調査(乳児期前期)

1) 被験者

第1回調査で協力の得られた母親33名(乳児平均月齢:3M, 2M~4M)

2) 調査期間

1999年6月~1999年8月

3) 質問紙

母親に対する育児に関する質問紙

第1回調査に対応した項目とし、赤ちゃんの性格・気質に関する項目は、乳児期前期にみられる反応を取り入れた。

手続き: 第1回調査で今後の調査協りに同意が得られた68名の母親に郵送法にて、質問紙調査を行った結果、33名から協力が得られた(回収率.49)。

3. 分析方法

1) 5段階尺度で回答をもとめた各項目は、「非常にあてはまる」を5点、「ややあてはまる」を4点、「どちらともいえない」を3点「あまりあてはまらない」を2点「全くあてはまらない」を1点として得点化した。

各項目は領域別に因子分析を行った。なお分析には統計パッケージ「STATISTICA」を使用した。

2) 母親に対する「育児に関するアンケート」で、文章完成形式の記述には、研究協力者3名が個別にKJ法に基づきグルーピングした後結果を合わせ、不一致の部分は討議の上結果とした(一致率は.92)。

■ 結果

1. Ns. 評定による新生児行動特徴

因子分析の結果、「睡眠・覚醒リズム」、「活気」、「反応性」、「情緒安定性」「泣き易さ」「泣きの強さ」の6因子が得られた(表1)。図2に示すように、「活気」と「睡眠・覚醒リズム」に強い正の相関($r = .71, p < .0001$)、「睡眠・覚醒リズム」と「泣き易さ」に中程度の負の相関($r = -.44, p < .02$)があり、授乳の状態や身体生理的状态が新生児の行動に反映していると考えられる。

2. Ns. 評定による母子相互作用

表2に示すように、「応答性」「母親からの働きかけ」「母親の疲労度」3因子を抽出した。Ns.による行動評定で、「活気」が「母親からの働きかけ」に中程度の

表2. 母子相互作用評定における因子負荷量

項目	母親からの働きかけ	応答性	母親の疲労
母子ともにゆったりしている	0.011	0.878	-0.407
母子はよく見つめ合っている	0.301	0.794	0.268
母親はよく語りかけている	0.876	0.040	-0.209
母親はよく微笑んでいる	0.806	0.274	-0.142
母親は疲労が感じられる	-0.242	-0.054	0.897
寄与率	0.313	0.276	0.221

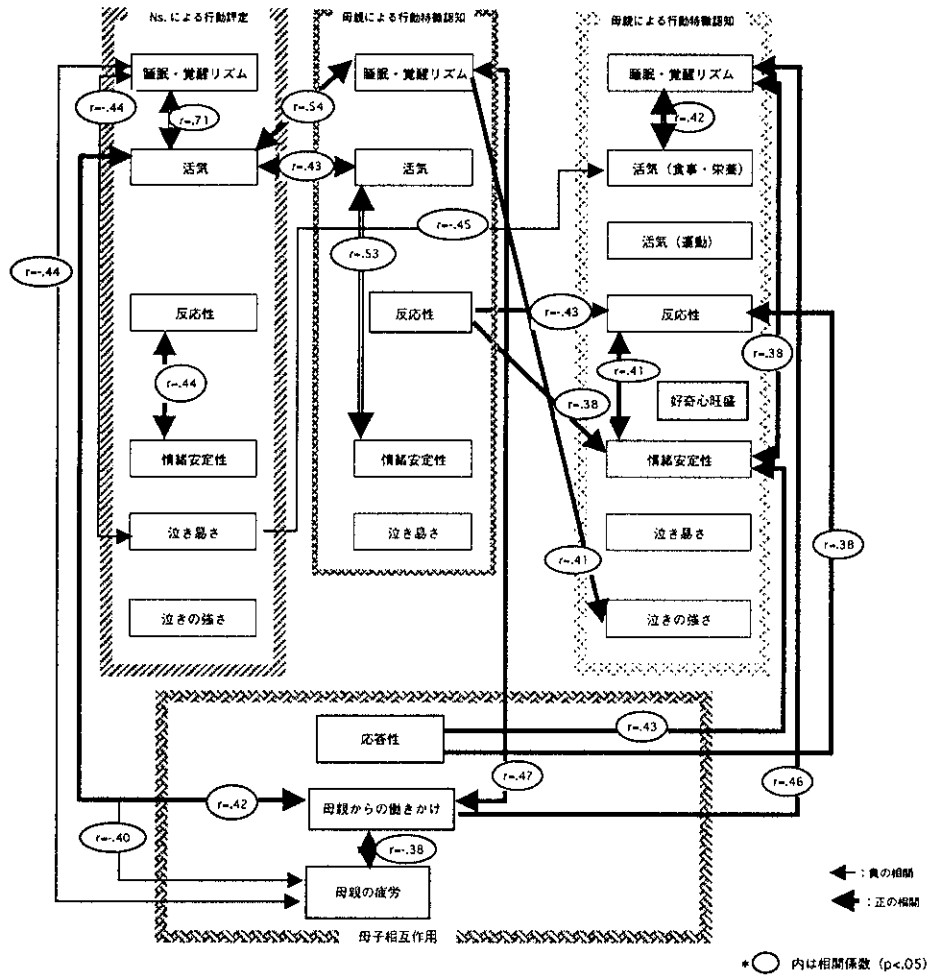


図2. 乳児の行動特徴と母子相互作用の関連

による評定と母親の認知で有意な相関がみられたのは、Ns.評定の「活気」と、新生児時期における母親認知の「活気」および「睡眠・覚醒リズム」($r = .43, p < .02 / r = .54, p < .004$)であった。新生児期においては、Ns.が乳児と関わっている時間帯と母親が関わっている時間帯が違うが、母児同室、別室に関わらず母親が主として関わっているのが授乳場面であることから、より一致した見解になったと思われる。乳児期前期においては、「睡眠・覚醒リズム」と「活気(栄養・食事)」が正の相関($r = .42, p < .03$)、および「情緒的安定性」が「睡眠・覚醒リズム」、および「反応性」

正の相関がみられた($r = .42, p < .03$)。新生児期においても、乳児からの反応が、養育行動を喚起していることがわかる。また、Ns.の行動評定で「睡眠・覚醒リズム」も「活気」も、「母親の疲労度」と負に相関($r = -.44, p < .02 / r = -.40, p < .04$)がみられたことから、「母親の疲労度」に、授乳状態や身体生理の状態が影響していることが考えられる。また、「母親からの働きかけ」と「母親の疲労度」が負に相関($r = -.39, p < .05$)があり、分娩経過や授乳等で母親の疲労度が高いことが予測されるケースでは、特に母親への心身への支援が必要となる。

3. 母親による乳児行動特徴認知

新生児期と乳児期前期における母親による乳児行動特徴の認知は、それぞれ5因子、8因子を得た。両者ともNs.評定による行動カテゴリーと対応しているが、新生児期においては質問項目を少なくした影響で因子数が少なく、乳児期前期では「活気」、「反応性」でそれぞれ分化し、因子数は増えている。後者については、乳児の成長・発達に伴って、特に心理社会的側面の行動が明確になっていると考えられる。Ns.

とそれぞれ正の相関($r = .38, p < .05 / r = .41, p < .003$)がみられた。乳児期前期は依然生活リズムの確立過程にあり、授乳が順調で睡眠・覚醒リズムが安定していることは、乳児の情緒的安定や反応性に反映すると考えられる。また、Ns.の評定で「泣き易さ」が、乳児期前期の「活気(栄養・食事)」と負に相関($r = -.45, p < .02$)していたことから、「泣き易さ」は授乳の確立に関係していることが予測される。新生児期と乳児期前期で母親の認知で有意な相関がみられたのは、新生児期の「反応性」と乳児期前期の「反応性」および「情緒安定性」($r = .43, p < .02 / r = .38, p < .05$)、新生児期の「睡眠・覚醒リズム」と乳児期前期の「泣きの強さ」($r = .41, p < .03$)であった。

新生児期の相互作用評定で「応答性」と乳児期前期の「反応性」および「情緒安定性」に正の相関があった($r = .38, p < .05 / r = .43, p < .02$)。新生児期から母子相互作用で応答的なやりとりができていない乳児は、乳児期前期によく反応し、情緒的にも安定していると考えられる。また、新生児期に母親がよく働きかけていた乳児は、乳児期前期において「睡眠・覚醒リズム」が安定していた($r = .46, p < .02$)。

4. 母親による「赤ちゃんの性格」についての記述

新生児期、乳児期前期ともに具体的な性格を記述したものが多かったが、断定的ではなく「～と思う」といった表現がみられた。また、「わからない」の回答は、新生児期では25.8%、乳児期前期では21.2%と減少してはいるが、すべての母親が「性格」として受け止めているわけではなかった。しかしながら、新生児期においてみられた「母親自身の期待や希望」、「両親の性格」の記述は乳児期前期ではなく、より具体的な性格としてとらえているようである。

2回調査の両方に協力の得られた33名について、具体的な性格についての記述を整理してその変化をみると、必ずしも一貫しておらず、例えば「おとなし

い」から「活発」のように多くが変化している(表3)。

5. 母親による「赤ちゃんの将来」への思いについての記述

新生児期、乳児期前期ともに「健康で」「優しい子に」「自由に」など、漠然とした思いを表現する傾向にあった。「立派な社会人に」といった成人後に焦点をあてた具体的な記述もみられたが少なかった。母親は日々の育児へ関心が向き、「わが子をどんな子どもに育てたいか」ということについてまだ具体的にはなっていないと考えられる。また、後者はすべて男児であったことから「性役割」等の期待があることが予測され、今後継続して検討していく。

2回調査の両方に協力の得られた33名について整理すると、変化はみられるものの、5割前後は同様の内容であった(表4)。また、「赤ちゃんの性格」についての記述と明らかな関連性がみられなかったことから、乳児期前期までは、「赤ちゃんの将来」への思いは、「赤ちゃんの性格」をふまえて抱いているというよりも、母親自身の経験やパーソナリティ等が反映していると考えられる。

6. 母親による「赤ちゃんの性格」と乳児の気質および相互作用の関連

新生児期における母親による「赤ちゃんの性格」で「おとなしい」群と「活発」群とで乳児の行動特徴、相互作用を比較すると、「活発」群が「おとなしい」群より新生児期のNs.の評定による「睡眠・覚醒リズム」がより安定していて、新生児期授乳場面で「母親からの働きかけ」がより盛んだった。また乳児期前期においても「睡眠・覚醒リズム」がより安定していて、「好奇心旺盛」であった(図3)。新生児期「睡眠・覚醒リズム」が安定している乳児は、母親から「活発」な乳児として受け止められ、「母親からの働きかけ」を促進していた。また、乳児期前期においても安定した「睡眠・覚醒リズム」や「好奇心旺盛」さにつながっていると考えられる。

新生児期における母親の「赤ちゃんの将来」への思いでは、「元気で」と記述した母親がもっとも多く、「心優しく」がそれに次いだ。「元気で」と記述した母親の乳児はそうでない乳児にくらべてNs.評定による「泣き易さ」の傾向がより強く、「心優しく」と表現した母親の乳児はそうでない乳児より、Ns.評定による「反応性」(p<.01)の平均得点が

表3. 母親がとらえた「赤ちゃんの性格」新生児期と乳児期前期の変化

新生児期において母親がとらえた「赤ちゃんの性格」	乳児期前期において母親がとらえた「赤ちゃんの性格」
おとなしい 13	おとなしい 3 (23.1%)
	活発 5 (38.5%)
	甘えん坊 2 (15.4%)
	わからない 3 (23.1%)
活発 8	活発 2 (25.0%)
	おとなしい 4 (50.0%)
	甘えん坊 1 (12.5%)
	わからない 1 (12.5%)
かわいい 1	おとなしい 1 (100.0%)
分からない 10	おとなしい 2 (20.0%)
	活発 4 (40.0%)
	明るい 2 (20.0%)
	わからない 3 (30.0%)
無回答 1	
総人数 33	33

*数値は人数、()内は新生児期のカテゴリ別に占める割合を示す。

表4. 母親の「赤ちゃんの将来」への思いの記述新生児期と乳児期の変化

新生児期における母親の「赤ちゃんの将来」への思い	乳児期前期における母親の「赤ちゃんの将来」への思い
心優しく 9	心優しく 6 (66.7%)
	元気で 1 (11.1%)
	幸せに 1 (11.1%)
	母親の希望 1 (11.1%)
元気で 10	心優しく 3 (30.0%)
	元気で 4 (40.0%)
	幸せに 2 (20.0%)
	社会人としての期待 1 (10.0%)
幸せに 4	心優しく 2 (50.0%)
	幸せに 2 (50.0%)
社会人としての期待 2	社会人としての期待 1 (50.0%)
母親自身の希望 3	心優しく 1 (50.0%)
	心優しく 1 (33.3%)
	社会人としての期待 1 (33.3%)
わからない 1	母親自身の希望 1 (33.3%)
無回答 4	わからない 1 (100.0%)
	幸せに 2 (50.0%)
総人数 33	元気で 1 (25.0%)
	社会人としての期待 1 (25.0%)
	無回答 1 (25.0%)

*数値は人数、()内は新生児期のカテゴリ別に占める割合を示す。

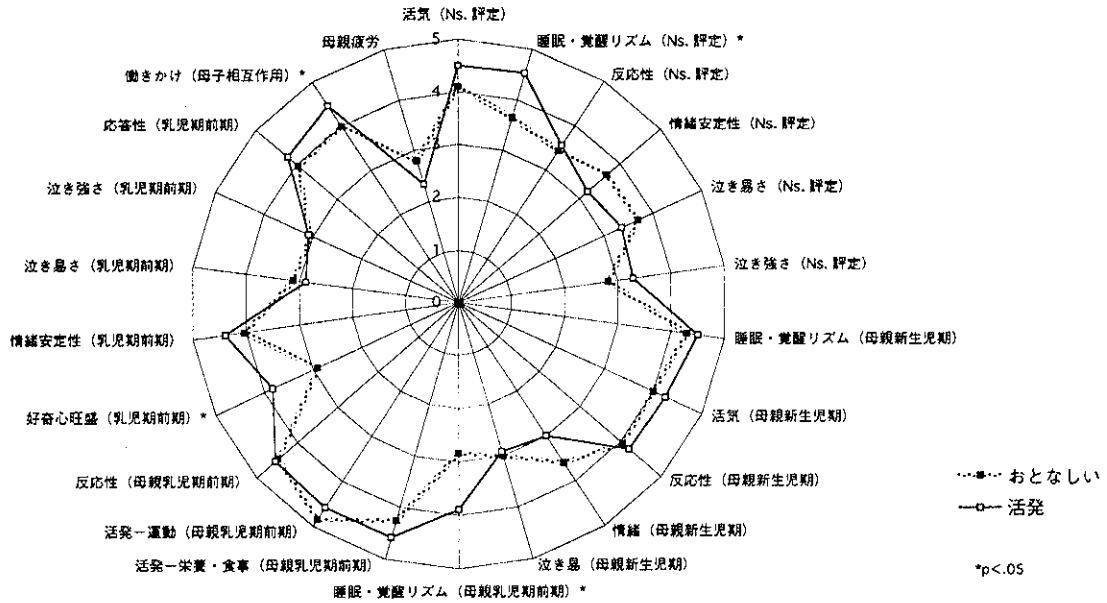


図3. 新生児期における母親による「赤ちゃんの性格」と乳児行動特徴および相互作用の関連

より低かった。

乳児期前期における母親による「赤ちゃんの性格」の記述のちがいによる有意な関連はみられなかった。

乳児期前期における母親の「赤ちゃんの将来」への思いで、「元気で」と表現した母親の乳児は、そうでない乳児よりNs.による評定での「活気」($p < .004$)と「睡眠・覚醒リズム」($p < .007$)、母親による行動特徴認知での「睡眠・覚醒リズム」($p < .02$)、乳児期前期の「活気」・「栄養・食事」($p < .05$)の平均得点が低かった。また、相互作用評定における「母親からの働きかけ」の平均得点がより低かった($p < .02$)。新生児期より授乳がなかなか進まず、「睡眠・覚醒リズム」が不安定な乳児に対して母親は、より「元気で」育つことを強く望み、「母親からの働きかけ」は消極的になっている可能性が考えられる。

■ 考 察

乳児期前期までは母子ともに生活リズムの確立過程にあると考えられ、乳児の行動特徴には、依然授乳の状態や身体生理の状態が反映していると考えられる。しかしながら、乳児の成長・発達とともにより心理社会的反応が明確になり、母親もわが子の個性として受け止めるようになってきている。乳児の行動特徴はその傾向が新生児期から一貫している側面もあるが、多くは変化している。とりわけ「赤ちゃんの性格」としての受け止めは、乳児期前期ではより明確になっているが、新生児期と内容は多くが変化している。したがって、特に母親がわが子を

どう受け止めるかということは、乳児の成長・発達状況や家族関係、援助者の関わり等で変容することである。認識や行動変容が容易な発達の極初期にこそ、個々の母子へのきめ細かな支援が必要なのである。

一方「赤ちゃんの将来」への思いは、比較的一貫していた。乳児期前期までは、「赤ちゃんの将来」への思いは、「赤ちゃんの性格」をふまえて抱いているというよりも、母親自身の経験やパーソナリティ等が反映していると考えられる。今後わが子の個性がより明確に認識されるようになると、実際の養育姿勢として示されると考えられる。また、「性役割」への期待も明確化してくることが予測される。

母親のわが子の受け止めや関わりに影響するのが、乳児の行動特徴である。授乳も順調で活気があり、睡眠・覚醒リズムが安定している乳児は、母親の働きかけを促す。逆に授乳がなかなか進まず、睡眠・覚醒リズムが不安定な乳児の母親は疲労度が高く、母親からの働きかけが消極的になっている。新生児期においても、乳児の反応は、母親の養育行動を喚起していると考えられる。また、母親の疲労度が高いことも、当然のことながら母親からの働きかけに影響している。さらに、新生児期からよく母親から働きかけをし、応答的なやりとりができていた乳児は、乳児期前期に睡眠・覚醒レベルが安定して、人や物によく反応していることから、睡眠・覚醒リズムが不安定な乳児や分娩経過や授乳等で母親の疲労度が高いことが予測されるケースでは、母子相互作用や母親への心身への支援が重要であると考えられる。本調査は新生児期と乳児期前期の結果であるが、成

長・発達とともに乳児は外界への探索行動が盛んになり、情緒表出の仕方も多様になる。したがって、養育者の養育姿勢や関わり方も変化してくると考えられる。上村による6、生後8ヶ月を境に乳児の行動傾向と母親の働きかけの関係が変わるという見解も考慮し、今後のさらに調査を継続していく必要がある。

■ 研究の限界と今後の研究計画

本研究は縦断的調査であるため、被験者数が減少する可能性があることや、質問紙調査では乳児の行動特徴や親子関係の客観性に限界があることから、被験者の協力を得て参加観察や録画等の方法も検討している。さらに、これまでは母親への質問紙調査であったが、今後は父親にも調査協力を依頼する予定である。

■ 結論

1. 乳児期前期までは、乳児の行動特徴には依然授乳の状態や身体生理的状态が反映していた。成長・発達とともに乳児の行動特徴は明確化しているが、母

親の受け止め方は流動的で支援の可能性が期待される。

2. 母親による「赤ちゃんの将来」への思いは、新生児期、乳児期前期ともに漠然とした内容が多かったが、後者では不明とする回答がなかった。乳児期前期までは、母親自身の経験やパーソナリティ等が反映していると予測されるが、今後わが子の個性がより明確に認識されるようになると実際の養育姿勢として示されると考えられる。

3. 乳児の身体生理的状态が不安定であったり、分娩経過や授乳等で母親の疲労度が高いことが予測されるケースでは、母親の乳児の受け止め方や養育行動への影響が予測され、特に乳児期前期までの母子相互作用や母親への心身への支援の重要性が示唆された。

謝 辞

本調査にご協力いただいた松田病院松田修典院長をはじめスタッフの方々、ならびに山下産婦人科内科小児科医院、山下通隆院長をはじめスタッフの方々、アンケートにお答えいただいたお母さまにこころより感謝申し上げます。

文 献

- 1) Klaus, M.H., & Kennell, J.H.: Parent-Infant Bonding. 2ed. The C.V. Mosby Company, 1985. (竹内徹, 柏木哲夫, 横尾京子(訳): クラウスケネル親と子のさすな. 医学書院, 1985).
- 2) 古澤頼雄: 新生児の個体反応性. 心理学評論, 22(1), 1979.
- 3) 古沢頼雄: 発達初期における母子交互性—新生児・乳児の養育者に及ぼす影響を中心に—. 教育心理学研究, 23, 1975.
- 4) Brazelton, T.B., & Nugent, J.K.: Neonatal Behavioral Assessment Scale. 3rd edition. Mac Keith Press, 1995. (穂山富太郎 監訳, 大城昌平・川崎千里・鶴崎俊哉 訳: ブラゼルトン新生児行動評価原著第3版. 医歯薬出版株式会社, 1998.)
- 5) 陳省仁, 呉敬慈: 「泣き」や「ぐずり」と乳児の発達. 三宅和夫(編) 乳幼児の人格形成と母子関係. 東京大学出版, p.p.77-94, 1991.
- 6) 上村佳世子: 母子関係と子どもの気質. 田島信元 乳児の気質・母子相互交渉と自己認識形成との関連について. 文部省科学研究費研究成果報告書, 15-25, 1990.
- 7) 庄司順一・副田敦裕・岩崎亜美・前川喜平: 子どもの気質に関する研究(2)—母親がとらえた新生児の行動特徴の検討—. 日本総合愛育研究所紀要, 33, 245-249, 1996.
- 8) 川喜多二郎: 発想法—創造性開発のために. 中央公論社, 1993.
- 9) 川喜多二郎: 続・発想法—KJ法の展開と応用. 中央公論社, 1993.
- 10) 川喜多二郎: 川喜多二郎著作集5KJ法—渾沌をして語らしめる. 中央公論社, 1996.

親の育児感情と乳幼児の感情認知との関連性について

分担研究者 大日向雅美
(恵泉女学園大学教授)

研究要旨 本研究は乳児の感情をその表情から把握する能力が父母間でどのような差異があるかを明らかにするとともに、親としての育児感情がそこにどのように影響を及ぼすかについて、併せて検討したものである。結果は、育児感情の一部に父母間の差異が認められたものの、類似性の方がより顕著であった。一方、乳児の感情認知に関しては、父母間の差異は明らかではなく、むしろ、父母ともに、育児に対する不安や苛立ちの感情が、乳児の感情認知の際に否定的な要素をもたらす傾向が示唆されている。

■ 研究目的

自己の感情を言葉で十分に伝達できない乳幼児に対しては、養育者がその表情から乳幼児の感情的に判断して対応する能力が求められる。通常は乳幼児の感情認知は母親に適性があると考えられているが、一方、父親の感情認知能力との間にどのような差異があるのだろうか。さらには、養育者側が抱えている育児ストレス等の要因は、乳幼児の感情認知にどのような影響を及ぼすのだろうか。

本研究は、育児能力に関する父母間の比較を行う研究の一環として、乳幼児の感情を把握する能力に焦点を当てて父母間の相違を検討すると共に、その背景要因の一つとして、養育者としての育児感情がどのように影響しているかを明らかにしようとしたものである。

■ 研究方法

1. 研究方法

乳幼児をもつ父母を対象に、乳幼児の感情認知検査と育児感情についての調査票調査の2種類を実施した。

1) 乳幼児の感情認知検査

乳幼児の感情認知検査は「IFP日本版(I FEEL Pictures):以下JIFPと記す」を用い、調査対象1人に

検査者一人がついて、次の要領で個別に実施した。

JIFPは30枚の12ヶ月児たちの表情の写真から構成されている。その写真を1枚ずつ提示し、次のA(自由回答)とB(評定)の2通りの回答を求めた。

A:「この写真の赤ちゃんがあらわしている、一番強くてはっきりしている感情・情緒はどんなものでしょうか。あなたの心に最初に浮かんだ言葉をそのまま、回答してください」

B:「それぞれの写真の赤ちゃんがあらわしている感情や情緒が、どれくらい快あるいは不快なものであるかについて、評定してください」(評定は「非常に不快」から「非常に快」までの5段階評定)

検査所用時間は一人あたり約20分であった。

2) 育児感情についての調査票調査

育児感情を調べるための調査票調査は、首藤(1998)を参考に作成した。内容的には、親子間の共感経験を尋ねる13項目と、育児に対する充実感や不安・苛立ちの感情を尋ねる33項目から構成されている。この調査票はJIFPS検査の終了後に調査票を渡し、自宅で記入して1週間以内に返送してくれるよう依頼を行った。

2. 調査対象

調査は神奈川県横浜市内に所在する保健所の乳児健診に来所した父母を対象とした。

調査対象有効数は次の通りである。

表1 親子関係の共感経験について

共感経験	父親	母親
1) 子どもが気持ちがひとつになっていると感じたことがある	4.11	4.68
3) 泣いている子どもを見て、自分まで悲しくなってきたことがある	3.44	4.16
5) 子どもを叱ったあと、子どもがどんな気持ちになったか想像したことがある	3.44	4.21
6) 子どもが病気の時、つらそうにしているのを見て、自分までつらい気持ちになったことがある	4.00	5.18*
7) 子どもが悲しそうにしている時、なんとかしてあげたくなったことがある	5.53	5.53
9) 子どもの話や表情から、子どもの気持ちを感じとろうとしたことがある	5.22	5.45
12) 子どもにプレゼントを買う時、子どもが喜んだ顔を想像しながら選んだことがある	5.33	5.37
13) 子どもの喜んでる様子を見て、自分までうきうきしてきたことがある	5.33	5.97***
分離経験		
2) 子どもと言葉やしぐさでやりとりするのが、めんどうになったことがある	2.56	2.92
4) 子どもの気持ちの変化についていけず、子どものことを不思議に感じたことがある	3.33	2.26*
8) 子どもが泣いていた時、その気持ちをわかろうとしたが、なぜなくほどに悲しいのか理解ができなかったことがある	3.33	3.61
10) 子どもがこれはおもしろいと言葉やしぐさで伝えてきても、自分は興味を持てなかったことがある	3.11	2.66
11) 子どもが何かを恐がっていた時、その気持ちをわかろうとしても、自分までその怖さを感じなかったことがある	5.33	5.37

JIFPS:父親20名 母親51名

育児感情の調査票調査:父親19名 母親40名

■ 研究結果

1. 育児感情

親子間の共感経験の13項目に対する評定値の結果は表1に、育児に対する充実感や不安・苛立ちを尋ねる33項目に対する評定値の結果は表2に示す通りである。本調査は調査対象数が現段階ではまだ少ないため、傾向を見るにとどめるが、表1、表2から以下の傾向が認められた。

まず、共感経験については、父母ともに「共有経験」を示す項目群の評定値が高く、「分離経験」を示す項目群の評定値が低い点で共通している。「共有経験」の中でも、項目7「子どもが悲しそうにしている時、なんとかしてあげたくなったことがある」、項目9「子どもの話や表情から子どもの身持ちを感じとろうとしたことがある」、項目12「子どもにプレゼントを買う時、子どもの喜んだ顔を想像しながら選んだことがある」、項目13「子どもが喜んでる様子を見

て、自分までうきうきしてきたことがある」の4項目の評定値は父母ともに高い。父母間で有意差が認められた項目は、上記の項目13と、項目6「子どもが病気の時、つらそうにしているのを見て、自分までつらい気持ちになったことがある」であり、両項目とも母親の方が父親に比べて有意に高いが、「共有経験」を示す他の項目では、父母間に有意差は認められていない。

一方、「分離経験」では、項目4「子どもの気持ちの変化についていけず、子どものことを不思議に感じたことがある」、項目10「子どもがこれはおもしろいと言葉やしぐさで伝えてきても、自分は興味を持てなかったことがある」の2項目で、母親よりも父親の方が評定値が高く、特に項目4で父母間の差は有意である。

次に、育児に対する充実感や不安・苛立ちの感情については、表2に示す通り、「充実感」を示す項目に対する評定値が高く、「苛立ちや不安感」を示す項目への評定値が低い傾向にある点では、父母ともに共通している。父母間で有意差が認められた項目は、項目22「子どもの中に、自分と似ているところを

見つけると、うれしい」、項目29「できることなら、子どものことは〇〇にまかせたいと思う」、項目32「子どもと何となく気が合わないと感じることがある」であり、いずれも父親の方が母親よりも有意に高い評定値を示している。

2. 乳児の感情認知 快・不快の評定

写真1～写真30の乳児の表情が示す快の程度に関する評定値の結果は、表3に示す通りである。30枚の写真の中で、評定値に父母間で有意差が認めら

れたものは、1枚(写真14)のみである。JIFP実施マニュアルによると、写真14に対する自由回答は、「ねむい」と「注意・疑問・驚き」(具体的には、観察している・関心・きょとん・疑惑・げげん・好奇心・真剣・夢中・じっと見ている・何だろう・熱中・びっくり・すごい)等の回答が多く寄せられる写真である。喜怒哀楽は正確に把握しづらい写真といえるが、この写真に限って父親の方が母親よりも「快」と判定する結果が得られている。しかし、他の29枚では、乳児の感情の「快・不快」の評定に父母間の差は認められない。

表2 育児感情に関する評定値

(充実感)	父親	母親
1) 子どもと遊ぶのが楽しい	3.78	3.74
2) 子どもの成長する様子をほほえましく思う	3.78	3.95
5) 子どもと接していると、何ともいえない充実感を感じる	3.22	3.63
6) 子育てを通して、自分が成長していると感じる	3.11	3.50
7) 自分の子どもが一番かわいい	3.89	3.87
10) 親になれてよかったと思う	3.78	3.82
11) 親としての自分が好き	3.22	3.63
12) 子どもを見ていると元気づけられる	3.89	3.82
15) 親になり気持ちに張りができた	3.44	3.24
17) 親として行動しているときが、自分らしい	2.89	2.79
19) 自分ではなくてはならない存在だと思うようになった	2.56	2.92
20) 親になって、他人に寛大になった	1.67	2.39
22) 子どもの中に自分と似ているところを見つけると、嬉しい	3.78	3.16*
24) 子どもの興味や関心を広げてやりたいと思う	3.89	3.89
27) 親になって、物事に積極的に取り組むようになった	2.67	2.50
30) 子どもの成長発達がよくわかった	3.33	3.50
31) 弱い立場の人に思いやりをもつようになった	3.22	3.29
(苛立ち・不安)		
3) 子どもから解放されたい	3.44	4.16
4) 子どもの相手をすると疲れてくる	2.56	2.68
8) 子どもと接していると、自分の性格がきらいになる	2.33	1.95
9) 子どものことがわずらわしくてイライラする	2.00	2.11
13) 子どもの長所より短所が目につく	2.00	1.89
14) 子育てを負担に感じる	2.11	2.13
16) 親になって、行動が制限されているのが苦痛	2.33	2.58
18) 親として自分は不適格だと思う	2.11	1.84
21) 親になって、自分に自信がもてなくなった	1.67	2.39
23) しつけのとき、どうしたらよいかわからなくなる	2.56	2.58
25) 子どもには親が決めたとおりにさせたい	1.56	1.47
26) 他児に比べて、うちの子は育てにくいと思うことがある	1.89	1.55
28) 自分の関心が子どもに集中して、視野が狭くなった	2.11	2.08
29) できることなら、子どものことは妻にまかせたいと思う	1.89	
できることなら、子育てをだれかに代わってほしい		1.18***
32) 子どもと何となく気が合わないと感じることがある	2.33	1.50**
33) 「子どもがもっと〇〇だったらいいのに」と思うことがある	1.33	1.82

3. 育児感情と乳児の感情認知との関連性

育児に対する充実感や不安・苛立ちの感情と乳児の感情認知との関連性をみる。具体的には、育児に対する充実感や不安・苛立ちの感情を尋ねる33項目の因子分析から確認された2因子(「充実感」「不安・苛立ち」)の各因子得点を四分位点によって、high群、low群に分け、「充実感」の高い群と、「不安・苛立ち感」の高い群を抽出し、JIFPの自由回答結果を比較した。各群とも4名(高充実群:父親4名、母親4名/高不安・苛立ち群群:父親4名、母親4名)ずつであり、人数が少ないため、自由回答をそのまま記述して、傾向をみることにする(表4)。

表4が示す通り、高充実群も高不安・苛立ち群も、乳児の感情認知の回答に大きな差異は認められない。表中の()内のカテゴリーは、JIFPマニュアルに示されている各写真が示す乳児の感情として最もポピュラーな回答カテゴリーであるが、それと照合しても、両群ともポピュラー回答のカテゴリーとかなり一致している。

しかしながら、高不安・苛立ち群の回答には、乳児の感情を年齢的にかなり高く、ややもすると意図的な解釈を加えていると思われる回答も散見され、この点は高充実群にはみられない傾向である。すなわち、写真2「イライラ」、写真9「せつない」、写真12「ぶ然」、写真17「ぶ然」、写真22「ナルシストな感じ」、写真23「冷めた感じ」、写真26「大人を見下す」、写真28「むかつく」等である。こうした感情認知は、育児に対する不安や苛立ちの結果としてもたらされたものなのか、あるいは逆に乳児の表情をこのように認知することが、育児疲労感やストレスを高じさせるのかは、別途、検討が必要であろう。

■ 考 察

育児感情、および乳児の表情から感情を把握する能力について、父母間の比較を行った結果、必ずしも明確な性差は認められなかった。一部の項目で、母親の方が子どもとの共有経験をより強く示す傾向が認められ、他方、父親では分離経験を示す傾向が得られている。しかし、他の大部分の項目では父

表3 JIFPの「快・不快」の評定値

	父親	母親
写真 1	3.75	3.90
写真 2	1.25	1.40
写真 3	3.05	3.12
写真 4	3.90	3.90
写真 5	3.50	3.73
写真 6	2.70	3.04
写真 7	4.05	4.17
写真 8	3.05	3.23
写真 9	3.10	3.17
写真10	2.65	2.69
写真11	2.25	2.31
写真12	2.25	2.19
写真13	3.05	2.73
写真14	3.80	3.30**
写真15	2.70	2.92
写真16	1.75	1.82
写真17	1.75	1.94
写真18	3.30	3.29
写真19	1.25	1.25
写真20	2.90	2.81
写真21	3.95	3.92
写真22	4.30	4.40
写真23	3.25	3.08
写真24	4.65	4.75
写真25	3.10	3.02
写真26	2.95	2.88
写真27	3.60	4.08
写真28	2.15	2.21
写真29	2.95	3.33
写真30	2.85	2.75

母ともに同様の傾向が示されていて、有意差はない。同様に、育児における充実感あるいは苛立ちや不安を尋ねた項目でも、父母の回答は傾向として類似性が高い。しかしながら、「できることなら育児は妻に任せたい」「子どもと気が合わないと感じることもある」等、育児からの距離感を大きくする回答も父親に顕著にみられた点である。

このように、育児感情の面では、一部に父母間の差異が示されてはいたものの、乳児の感情認知では殆ど性差が認められていない。むしろ、育児に不安や苛立ちの強い場合、父母ともに、乳児の感情認知にやや意図的かつ否定的な要素が込められている傾向が認められた。本研究は、乳児の感情検査と育児感情との関連性を検討しようとしたパイロットスタディであり、今後は調査対象をさらに広く求めて、分析を深めていくことを課題としたい。

表4 JIFPの自由回答

()内は、ポピュラー反応のカテゴリ
 上段:「充実感」の高い群 下段:「不安感・苛立ち感」の高い群

写真1 (カテゴリ:喜び)	写真16 (カテゴリ:悲哀)
たのしい/照れている/どうしたの/成功して喜んでいる	いやだわ/がまん/つまらない/泣くぞ
安心/安心/照れている/はにかみ	不満そう/気に入らない/ジレンマ/怒り
写真2 (カテゴリ:悲哀)	写真17 (カテゴリ:怒り)
かなしい/おもちゃを取られてかなしい/かなしい/自分の要求が通らない	行きたくない/反抗/これでいいのかな/怒られて、「僕、悪いの?」
怒っている/欲求をみたされず、イライラ/悲しい/深いかなしみ	不満そう/ぶ然/相手の様子をうかがう/怒り
写真3 (カテゴリ:注意・疑問・驚き)	写真18 (カテゴリ:注意・疑問・驚き)
何かな?/これでいい?/訴える/おすまし	どうしようかな/さみしい/夢中で遊ぶ/楽しい
はげっとしている/集中/きょとん/おどろき	見て考えている/集中/真剣に遊んでいる/夢中
写真4 (カテゴリ:喜び)	写真19 (カテゴリ:悲哀)
どうしたの/ごまかしている/何して遊ばかな	いたい/ほっとしている/食べたいお菓子、落ちちゃった/怒る
興味/興味/何か発見/わくわく	悲しそう/納得できない/痛い/かなしみ
写真5 (カテゴリ:ねむい)	写真20 (カテゴリ:注意・疑問・驚き)
おはよう/だるい/ねむい/ごきげんな寝起き	どうしようかな/興味/手に乗った虫を見ている/残念
安心/安心/すましている/安心	興味をもつ/気に入る/何か見つけて遊ぶ/興味
写真6 (カテゴリ:欲求)	写真21 (カテゴリ:喜び)
かなしい/不安/待って/ご飯、ちょうだい	おいしい/同意を求めている/僕、可愛いでし/満足
訴えている/お願い/かまってほしい/ちょっと、怒っている	楽しそう/問いかけに耳を貸す/自分がやったことを示す/はにかみ
写真7 (カテゴリ:喜び)	写真22 (カテゴリ:喜び)
おいしい/安静にしている/おいしい/おいしい	ねむい/気持ちいい/ママ、抱っこして/楽しい
楽しそう/気を取られている/-一人で遊んでいる/楽しみ	甘え/気持ちいい/ナルシストな感じ/安心
写真8 (カテゴリ:注意・疑問・驚き)	写真23 (カテゴリ:注意・疑問・驚き)
あれ?/期待/テレビに熱中している/いたずらしてもいいかな	なーに?/注意をひきたい/飴、食べている/考え中
何か見て考えている/考え中/何か見つけて研究/たのしみ	興味/見て考えている/冷めた感じ/楽しみ
写真9 (カテゴリ:注意・疑問・驚き)	写真24 (カテゴリ:喜び)
泣いちゃう/疑問/ママ何してるのかな?/満足	ねむい/満足/呼びかける/うれしい
何か見て考えている/安心と不安の間/せつない/安心	楽しさの訴えかけ/楽しそう/ご満悦/楽しみ
写真10 (カテゴリ:注意・疑問・驚き)	写真25 (カテゴリ:ねむい)
これは何?/さみしい/取られたおもちゃ、返して/楽しく遊んでいる	ねむい/安心/ねむい/ねむい
興味をもって見てる/興味/考え中/かなしみ	安心/ねむそう/ねむい/ねむい
写真11 (カテゴリ:怒り)	写真26 (カテゴリ:疲れ)
何しようかな?/さみしい/怒られている/得意げ	ぼかぼかあったかい/虚脱/パパ、大きい/ちょっとねむい
考えている/思案/何かまずいことをした/たいくつ	ほっとしている/ほっとしている/大人を見下す/ねむい
写真12 (カテゴリ:注意・疑問・驚き)	写真27 (カテゴリ:喜び)
疲れた/不思議/お友達、何してるのかな?/興味	はい/あわてている/いやだ/うれしい
怒っている/ぶ然/今はかまわないでほしい/たいくつ	焦燥/何か訴えている/大爆発/おどろき
写真13 (カテゴリ:注意・疑問・驚き)	写真28 (カテゴリ:怒り)
私も連れてって/驚いている/怒られて半泣き/悲しい	何やってるの?/怒り/知らない人を見ている/~がしたい
何か訴えている/泣く前/強烈なものを見つける/かなしみ	不安な興味/怒っている/むかつく/おどろき
写真14 (カテゴリ:ねむい)	写真29 (カテゴリ:悲哀)
ねむい/だるい/おはよう/びっくり	どうしたの?/何も考えてない/お菓子ちょうだい/泣きそう
遊んでいる/あくび/ねむい/たいくつ	満足感/何か言いたそう/何かまずいことをした/おどろき
写真15 (カテゴリ:注意・疑問・驚き)	写真30 (カテゴリ:疲れ)
それ食べるの?/期待/テレビを見ている/もう少し、遊びたい	ちょっと寒い/頭がこんがらがっている/何、それ?/ねむそう
何か見て考えてる/思案/しゃべる言葉を考えている/わくわく	眠気/何だろう?/かまってほしい/たいくつ

文 献

- 1) 首藤敏元「思いやりと正義感の発達を規定する家族要因の研究」平成10年度厚生科学研究報告書(第1/6)131~143頁 1998年
- 2) 日本版 I Feel Pictures実施マニュアル 1998年版

幼児期の自己制御機能の発達 —幼稚園での子どもの特徴と親子関係—

分担研究者 森 下 正 康
(和歌山大学教育学部教授)

研究要旨 幼稚園における幼児の自己制御機能について、思いやりおよび攻撃性との関係、さらに親子関係が自己制御機能の発達にどのような影響を与えるかについて検討した。そのために幼稚園児(3:10-6:10)の母親316名とクラスの担任教師11名に対して、子どもについて評定を求めた。分析の結果、幼稚園での子どもの特徴について、次のことが明らかとなった。

(1) 自己制御(自己抑制と自己主張)・思いやり・攻撃性尺度に関して、家庭での母親評定と園での担任評定との相関は全体に低い値であった。また二人の教師による評定間の一致度も低かった。

(2) 担任評定による園での子どもの自己抑制の発達に関して、男子では年中から年長にかけての発達が著しく、女子では年齢の上昇と共に発達していた。自己主張の発達に関しては、男子では年齢による変化がないのに対して、女子では年少から年中にかけて発達が見られた。

(3) 思いやりについて、年中児では、男子は自己抑制の高い群の方が得点が高いが、女子には有意差はなかった。年長児では、男女共に自己抑制も自己主張も共に高い群の得点が高かった。

(4) 攻撃性について、年中児では男子は自己抑制の低い群の方が、女子は自己主張の高い群の方が攻撃性が高かった。年長児では、男子の場合は自己主張が高く自己抑制の低い群の攻撃性が高く、女子の場合は自己抑制の低い群の攻撃性が高かった。

(5) 園での自己制御について、年中児の場合、母親の受容的態度が男子の自己主張を育て、母親の誘導スタイルが女子の自己制御能力全体を育てる可能性があった。それに対して、年長児の場合、母親の統制的態度や力中心スタイルが男子の自己抑制機能の発達を阻害する。また、女子に対しては、母親の力中心スタイルが自己主張機能を高め、さらに、母親の統制的態度が自己主張だけが強く自己抑制の低い子どもを育てる可能性がある。以上の結果は、親子関係と家庭での子どもの特徴との関連とは異なった結果であった。

■ 研究目的

人間が豊かに生きていくために、自己を抑制する機能と自己を主張する機能のバランスのとれた発達、つまり自己制御(self-regulation)機能の発達が重要だと考える。昨年度の、自己制御機能の発達に関する研究において、母親評定についての分析から次のような結果が得られた(森下,1999)。

幼児の自己抑制機能は「欲求不満耐性」「遅延可能性」「根気」の3因子から成っていた。また、自己主張機能は「正当な主張」と「能動性」の2因子から成っていた。自己抑制機能の発達について「欲求不満耐性」と「根気」は年中から年長にかけて発達することが明らかとなった。他方、自己主張機能の方は3歳児(その多くは4歳)以後すでに年齢による変化はなかった。

これらの自己制御機能の中で、抑制機能の発達が「思いやり」の発達と関連性が深いということ、さらに自己主張機能も、時には「思いやり」の発達を促進する可能性があるということが明らかとなった。ま

た、攻撃性の抑制には自己抑制機能が深く関連していた。

自己制御の発達に対して母親の果たす役割について検討した結果、男児の場合、母親の受容的態度が子どもの自己主張機能の発達に、時には自己抑制の発達にもプラスの影響を与える可能性があったが、両機能の発達に同時にプラスの影響を与える態度パターンは明確にはならなかった。女兒の場合、母親の受容的態度が自己抑制機能の発達にプラスの影響をもたらす可能性があるのに対して、統制的態度や力中心の養育スタイルは自己抑制や自己主張の発達にマイナスの影響をもたらす危険性があった。

すでに指摘したように、昨年度の研究には次のような問題点と課題が残った。子どもの自己制御等については母親の評定に基づくものであったが、母親の評定が妥当性の高いものであったかどうか問題となった。さらに、母親の養育態度等も母親自身の評定に基づくものであり、子どもの変数と母親の変数間の関連を分析した結果には、同一評定者による反応セットなどの影響が反映されている可能性があっ

た。また、家庭での子どもの特徴はそのまま幼稚園等での行動に現れるのか違うのか、幼稚園での子ども自己制御の特徴に関して、母親との相互作用はどのような影響を与えているのか等の課題が残された。

表1 分析の対象数

	男児	女児	計
年少児 (3:10-4:10)	41(33)	33(30)	74(63)
年中児 (4:10-5:10)	61(50)	53(47)	114(97)
年長児 (5:10-6:10)	68(63)	60(52)	128(115)
計	170(146)	146(129)	316(275)

() 内の数字は全てのデータがそろった者

そこで、本研究においては幼稚園場面での子どもの行動に焦点を当て、担任教師等からの評定と母親からの評定を基に、次の課題を検討したいと考える。

①家庭での子どもの特徴と幼稚園での子どもの

表2 自己抑制の尺度項目

項目
1. 先生や友だちの話を終わりでしっかりと聞く。
2. 面白くなくても、終わりでだまって人の話を聞く。
3. 「してはいけない」といわれたことは、しない。
4. 人のものを勝手にさわったり、使ったりしない。
5. 先生が話している時、退屈するとよそ見をしたり手遊びをする
6. 自分の使いたい遊び道具を、かわりばんこに使える。
7. 遊びの時、自分の順番がくるまで待てる。
8. 「あとにしなさい」といわれれば、待てる。
9. 欲しいものがすぐ手に入らなくても、がまんできる。
10. 遊んでいるとき、きちんとルールを守る。
11. 難しいことでも、あきらめずにやる。
12. ちょっと失敗したりうまくいかないと、すぐあきらめる。
13. 時間がかかっても、最後までがんばる。
14. けがをしたり、少しぐらい血が出たりしても泣かない。
15. やりたくないことでも、やらないといけなときはやる。

表3 自己主張の尺度項目

項目
1. 遊んでいるとき、ずるいことをした子に「だめ」という。
2. 友だちにいじわるされたり、いやなことをいわれたとき「やめて」という。
3. 自分の席に座っている子にのいて欲しいとき、「のいて」という。
4. ひどい悪口を言われたり、からかわれたとき怒る。
5. いやなことは、はっきり「いや」という。
6. 自分の番に誰かが割り込んできたとき、「順番を抜かさなさい」という。
7. 自分のものをとられたとき「かえして」という。
8. 自分の思ったことを、みんなの前でなかなか口に出していえない。
9. 人に聞かれたら、はきはき答える。
10. いやなことを言われたりされたりしたとき、泣いたりだまってしまうりする。
11. 進んで手をあげて発言する。
12. 他の人と意見がちがっていても、自分の意見を言う。
13. 入りたい遊びに、自分から「いれて」という。
14. してほしいこと、欲しいものははっきり大人に頼む。

特徴の比較(母親評定と教師評定の一致の程度)。

教師評定の信頼性の検討。

②幼稚園での子どもの自己制御、思いやり、攻撃性の発達の様相。

③幼稚園での自己制御と思いやりとの関連。

④幼稚園での自己制御と攻撃性との関連。

⑤親子関係が幼稚園での子どもの自己制御の発達にどのような影響を与えるか。

■ 研究方法

1. 調査対象

和歌山市近郊のW幼稚園において、年少・年中・年長児357名について、その母親に評定を求めた。この結果については先の研究(森下、1999)において報告している。次いで園児の担任教師に対して、クラスの子ども一人一人について評定を求めた。さらに、そのクラスの子どもたちをよく知っていると考えられる隣のクラスの担任教師にも評定を求めた。したがって、一人の子どもについて3人が評定したということになる。記名式とし、幼稚園の全面的な協力により回収率100%となった。その中で、記入漏れなどのデータを除いて、分析の対象となったのは、自己抑制や自己主張の項目に関する因子分析には母親評定によるデータを用いたが、その数は表1に示すように計316名であった。自己制御と他の変数との関連についての分析対象は、すべてのデータのそろった子ども(表1)計275名であった。

2. 手続き

母親に対しては園児を通じて家庭に質問紙を配布し、すべての質問紙に対して評定を求めた。その後、幼稚園の教師に対しては、自己制御、思いやり、攻撃性について幼稚園での観察を基に一人一人の子どもについて評定を求めた。一人の子どもについて二人の教師が評定することとなったが、その際、相

表4 思いやりの項目

1. めんどろみがよい
2. 素直である
3. 年下の子どもをかわいがる
4. 気がやさしい
5. 生き物をよくかわいがる
6. お手伝いをよくする
7. 友だちに対して親切である
8. 思いやりがある

表5 攻撃性の項目

1. 友だちとよくけんかする
2. ことばづかいが荒い
3. いうことを聞かない
4. すぐ暴力をふるう
5. 友だちをつねったり叩いたりする
6. 物を乱暴にあつかう
7. 気に入らないことがあると暴れる
8. 小さい子どもをいじめる

表6 母親の養育態度と項目

受容的態度	1. 子どもの悩みや心配事を理解している 2. 子どもと一緒に、外出や旅行をするのが好きだ 3. 子どもにたびたび話しかける 4. 子どもがこわがっている時には安心させてやる 5. うちで子どもと楽しい時間を過ごす 6. 子どもが喜びそうなことを、いつも考えている 7. 子どものことに、じゃぶん気を配っている 8. 自分のことは我慢しても、子どものためにしてやることがよくある
統制的態度	1. 子どものした悪いことは、みな、何かのかたちで罰を与えるべきだと思う 2. 子どもが外から時間どおり帰ってくるようにいつもさせている 3. 子どもを、自分の言いつけどおりに従わせている 4. 子どもに、何事もどんなふうにしたらよいかを、ことこまかに言い聞かせる 5. 子どもがすべきことをちゃんとしようまで、何回でも指示する 6. 子どもにはできるだけ私の考えどおりにさせたい 7. 子どもがいつけどおりにするまで、子どもを責め立てる 8. 子どもに、自分でものごとを決めさせることはあまりない

談しないで独立に記入するように依頼した。教師の負担を少なくするために、自己制御については母親評定に基づいて因子分析をおこない、尺度を作成し、その尺度について教師評定を求めた。

3. 調査時期

1999年2月から4月。

4. 調査内容

①自己制御に関しては、柏木の研究(1988)や教師や児童を対象とした予備調査を基に作成された矢川(1999)の項目を参考にして、自己抑制については25項目、自己主張については30項目を作成した。作成に当たって、家庭において親が観察することのできる内容に焦点を当てた。また、この項目の特徴は「…ができる」という表現ではなく、「…する」とうように行動の側面を評定する表現になっている。自分の子どもに当てはまるかどうか、「はい」「?」「いいえ」の3件法で評定を求めた。

母親の評定データに基づいて、

因子分析をおこない、自己抑制については3因子(欲求不満耐性・遅延可能性・根気)15項目(表2)、自己主張については2因子(正当な要求・能動性)14項目(表3)からなる尺度を作成した(森下、1999)。教師評定についてはこの尺度を用いた。

②思いやりと攻撃性:森下(1985)の項目それぞれ8項目ずつをランダムに配列をし(表4、5)、「はい」「?」「いいえ」の3段階評定を求めた。

③養育態度の受容と統制:鈴木ほか(1985)から受

容と統制についてそれぞれ8項目ずつ選択しランダムに配列した(表6)。上記と同じ3件法であった。

④養育スタイル:末田・庄司・森下の研究(1985)を基に10の日常場面を選び、各場面において「統制・無視」と「協調性」を示す各10項目ずつ選出した(表7)。それらを、力中心養育スタイルと誘導的養育スタイルに対応する尺度とした。各項目に対して、そのようなことがどの程度あったかについて、「よくある」「ときどきある」「あまりない」の3段階評定を求めた。

表7 母親の養育スタイル(力中心-誘導的スタイル)

家庭での場面と項目	
1	『夕食の用意ができていないのに、遊びに行ったまま帰ってこず、呼びにいくと「もっと遊んでいたい」と言い張った時』 (1)「ご飯だからだめです、早く帰ってきなさい」* (2)「また明日遊ぼうね」
2	『気分が悪くて寝ているところに、子どもが帰ってきた時』 (3)「しんどいからじぶんでやってね」 (4)「しんどいからしずかにしなさい!」*
3	『すぐ帰るからと留守番を頼んで出かけたけれど用事が長引き、急いで帰ってみると、そこらじゅう散らかしたまま遊びにいらした時』 (5)「今度からは気をつけてね」 (6)「ちゃんと留守番してなきゃだめでしょ!」*
4	『さわらないように注意しておいたのに、大切な預かり物を、子どもがさわって壊してしまった時』 (7)「だから言ったでしょ、どうするの!」* (8)「これからは気をつけようね」
5	『子どもと一緒にどこかに行く約束をしてあったのに、急用ができてしまった時』 (9)「ご用ができたからしかたないでしょ!」* (10)「また、今度しようね」
6	『用事で外出したため、夕食の準備が遅くなり、急いでしたくをしているのに、「おなかすいた、何か欲しい」などと邪魔ばかりする時』 (11)「すぐできるから我慢してね」 (12)「邪魔しないであっちへ行ってきなさい!」*
7	『他にもたくさん買い物があったので、子どもと約束していたオモチャを買ってくるのを忘れた時』 (13)「我慢しなさい!」* (14)「明日買ってくるから我慢してね」
8	『部屋のすみにほったらかしになっていたオモチャを、お母さんがうっかりとふみつぶした時』 (15)「こんなところにおいておくからでしょ!」* (16)「これからはちゃんと片づけようね」
9	『お手伝いを頼んだのに、「いやだなあ」と言って手伝おうとしない時』 (17)「手伝ってくれと助かるんだけどね」 (18)「どうしてできないの、もう大きいんでしょ!」*
10	『掃除の時、出しっぱなしのオモチャをかってに片づけてしまったが、後で子どもがやりかけたのにと不満顔の時』 (19)「約束の時間には片づけようね」 (20)「さっさと片づけないでほっておくからでしょ!」*

*印は力中心スタイル項目、他は誘導的(説明的)スタイル

■ 研究結果

1. 評定間の関連性

1) 母親評定と担任評定との相関

教師が認知する子どもの特徴と母親の認知する子どもの特徴が一致するかどうかを検討した。そのために、先の母親データの因子分析に基づいて作成された尺度について、担任評定による各尺度得点を産出し、その尺度得点と母親評定による尺度得点と